Heroldo de HEL

N-ro 53 septembro－julio 1994

ORGANO DE
HOKKAJDA ESPERANTO-LIGO

北海道エスペラント連盟
062 札幌市豊平区旭町４丁目１番４０号
北海学園大学 切替英雄 気付
HOKKAJDA ESPERANTO-LIGO
Kirikae-Hideo, Hokkaigakuen Daigaku,
Asahimachi 4－1－40 Tojohira-ku,
Sapporo-shi, 062, Japanio

ENHAVO

ADIAŬ, S-RO JIM DEER EN PORTLANDO !
札幌との姉妹都市ロンド交流の行方は？
ポートランドのＪ．Ｄｅｅｒ氏死去
Acuŝi HOŜIDA 星田 淳 2

ＳＥＳから
”外国からのお客様”の対応について
Emiko BABA 馬場恵美子 3

La verda stelo
〈緑の星〉の意味は
Mituisi K 三ツ石 清 4

Nia korespondado kun saĥalina samideanino
サハリンのＥＳＰ－ＩＳＴＯとの交流のその後
Acuŝi HOŜIDA 星田 淳 5

Aziaj samideanoj vizitis niajn urbojn
カンボジア・エスペラント協会会長チョム・ソッカ氏とネパール・エスペラント協会会長ムクンダ・パシック氏が，札幌と苫小牧訪問
Ejko Abe 阿部映子 6

RAPORTO DE LA SESA KOMENTATA KUNVENO DE HEL
第６回ＨＥＬ委員会報告
Acuŝi HOŜIDA 星田 淳 8

前号訂正 Korektoj(N-ro 52)

1頁左側6行目 memorajo⇒memoraĵo
〃 9行目 kunlogado⇒kunloĝado
〃 12行目 JEI KURSO POR CI
⇒JEI KAJ KURSO POR ĈI
〃 18行目 esutas⇒estas
1頁右側1行目 Leklamo⇒Reklamo
〃 5行目 KUVINA⇒KVINA
〃 8行目 Acusi HOSIDA
⇒Acuŝi HOŜIDA
〃 9行目 Hindrangeo
⇒Hidrangeo
9頁 1行目(みだし)
memorajo⇒memoraĵo
23頁 1行目(みだし)
Hindrangeo⇒Hidrangeo

El redaktejo 編集部から

暑い夏もやっと終り，あっという間に秋になりました。

それにしても，今年は本当に暑かったですね。世界大会で37.4度を経験して，札幌に戻れば涼しいと思ったら何と36.2度の記録的暑さでがっかりしました。

勉強の秋です。はりきって学びましょう。(でもやっぱり食欲の秋かな？)

(Ejko Abe 阿部映子)

ADIAŬ, S-RO JIM DEER EN PORTLANDO!

札幌との姉妹都市ロンド交流の行方は？ ポートランドのJ．Deer氏死去

Acuŝi HOŜIDA (Tomakomai)

La 4-an de marto mortis en Portlando S-ro Jim W. Deer, multjara gvidanto de tiea Esperanto-movado. Mi vidis lin por la unua fojo en la 57-a UK en Portlando, kie li estis LKK-estro.

Laŭ lia peto mi sendis salutan leteron al Portlanda Grupo en junio 1993. Tio estis "Sezona Saluto" por Solstica Kunsido, kiun antaŭ multaj jaroj oni reciprokis inter Sapporo kaj Portlando. Tiam en Sapporo pri tio okupiĝis nia malnova kolegino NAGATA Akiko.

Lia lasta letero al mi portas stampon "10 FEB 1994", do je 22 tagoj antaŭ lia morto! En la letero li petis min, ke mi skribu al la "korespondanto pri Sapporo" en lia Esperanto-Societo. Li donis al nova membro de sia grupo la taskon korespondi kun la grupo en Sapporo. Li volis rekomenci kaj vigligi iaman korespondadon inter la ĝemelaj urboj, Sapporo kaj Portlando.

Tamen ial li petis min skribi pri nia afero en Sapporo. La 25-an de februaro mi skribis al la korespondanto, kiu devis raporti en klubokunveno de la 21-a de marto. Mi supozas, ke mia letero atingis la korespondanton komence de marto, preskaŭ samtempe je lia morto.

Mi ne scias, ĉu la ekvinoksa kunveno tradicia de portlanda grupo ESPO(Esperanto Society of Portland and Oregon)vere okazis kaj la korespondanto raportis laŭ mia letero. Mi elkore esperas, tamen, ke la volo de bedaŭrata S-ro Deer iam baldaŭ efektiviĝos kaj revigliĝos esperanta korespondado inter ambaŭ ĝemelaj urboj.

＊＊＊＊ ＊＊＊＊ ＊＊＊＊

（Ｋｏｍｅｎｔｏ）札幌の姉妹都市、米国ポートランドのEsp.会の長年の Gvidanto だったJim W. Deerさんは今年３月４日亡くなった。彼と会ったのは第５７回ＵＫに札幌市長のメッセージを持って行った時（1972）だから随分古いことになる。

昨年６月初め、彼の手紙がきた。かれのEsp.会ＥＳＰＯと Unitarana preĝejo で行われるSolstica programoの為に今の季節のことや考えることなどを書いて送ってほしいとのこと。そういえば永田明子さんがＳＥＳでポートランドと姉妹都市通信をしていたとき、「地球として特別の日、春分、秋分、夏至、冬至にメッセージ交換して各地で集会を開こうと提案がきている」と言っていたのはこれだなと、思い出した。その思い出や、北海道の初夏の季節（桜、ライラックまつり、リラ冷え）、国際~~専従~~先住民年に当たってユーカラにあらわれている環境汚染への戒めなどをＢ５版２枚位に打って送った。

彼からの最後の便りは今年２月１０日の消印がある。姉妹ロンド札幌との連絡担当をきめた、３月２１日（春分）の会合で報告してもらうので近況を書いてほしいという。一応の説明を書いて担当者に出したのが２月２５日、丁度彼の死の頃着いたはずだ。春分の会合で読まれたかどうかは聞いていない。彼が望んでいたように、姉妹ロンド間の交流が又盛んになるといいなと思う。

S-ro J. Deer kaj S-ro A. Hoŝida

札幌エスペラント会（S．E．S）から

”外国からのお客様”の対応について

札幌では宮沢直人氏がパスポルタセルボとして、エスペランティストの宿泊に当たっていますが、それとは別にS.E.Sとして外国からの来客について役員で話し合いました。

＊個人宅での宿泊は一人一泊に付き5,000円をS.E.Sから支給する。
＊外食をした場合昼食(1,000円)夕食(2,000円)の範囲でおこないS.E.Sで支払う。
＊個人の来客(友人関係など)については、個別に本人が対応する。
＊これらの資金源(交通費.歓迎会.入場料.宿泊の負担等)については、バザーによる収入を運用しS.E.S会費からは取り崩さない
＊地元のエスペランティストの参加経費については自己負担とする。

また大本教関係の宿舎利用も出来るようです。本来であればS.E.S総会にて決定すべき事項でありますが急な来札の場合もあり暫定的に対応してゆきます。(札幌エスペラント会連絡係 馬場恵美子)

＜緑の星＞の意味は

名古屋、三ツ石　清

日高の静内に住む詩人・民謡研究家・風景傾真家の知人から来信。著書の寄贈をうける実はこちらから、＜８月１５日は、敗戦記念日である＞のタイトルで＜ｅｓｐ－ｉｓｔｏ，山登りの仲間等５０人に＜１５年戦争＞についての、ニュウギニアから生還した一兵士である私の切切たる想いを書いて暑中お見舞いの文と共に出した。動機は、ＪＥＩのＲＯ誌の日本エス運動史が連載されている。これに私の名前がよく出てくるが、それはどうでもよいことだが、筆者は、８月１５日を終戦の日と書いている。私は、日常会話の中ならばいざ知らず、歴史・記述の中では、敗戦の日であると書くべきだと思ったのである。

静内からの来信に＜日高山脈についての随想・詩などを集めた本を出した。贈呈する。書中に４ケ所ばかり（三ツ石君が。。。。）と貴兄の名前が出てくるが＞とある。一日遅れで、到着。＜日高の山なみなら　どこだってかまなわない＞ユニークなタイトル。本綴じ２５７頁。立派な本である。日高の雄峰・カムイエクウチカウシとポロシリ岳・ペテガリについての回想。を集めた私家版。読んでいると散文詩を読んでるような気がする。

さて、書中に、山友への手紙形式の回想に、＜森の中のキャンプ場は。。。。。星がまばたきかわしている夜は、やはりよい。宇宙の息使いがが伝わってくる　色々の星の色。老いた星は赤いという。梢の上にひろがる星空を仰いでは、。。。。。ふと三人で幌尻に行ったときのことを思いだす。三ツ石氏が、これを知っていますかといって取り出した一枚の小旗。エスペラントの旗だと言う。緑は平和を、星は希望をあらわすと教えてくれる。このことがきっかけで私は、後日、一冊の本を読んだことがある。それによると（緑の星）の意味は、様々な内容を秘めてるいるようだ。＜学問ばかりにふけるのは緑の野原で枯れ草をくうようなものだ（ゲーテ）＞＜理論は灰色で実行は緑だ（レーニン）。つまり緑の星は、生命と社会的責務の実行を現している。（同書２１３ｐ）

あるいは著者は、伊東三郎＜ザメンホフ＞でも読んだのかもしれない。

熱烈なザメンホフ教徒でエスペラント党員の私は、北海道の土台。日高山脈の盟主ポロシリ岳（２０５２ｍ）の頂上でも＜緑星旗＞をなびかせたのだろうか。そのころは、いや道内・放浪の間。山行きでも＜プレーナ・ヴオルターロ（第４版・１９５３年）小さいエス・エス辞典と原書の小説本をザックの底に潜せておいたものでした。どんなときでも、Ｐｌｅｎａ　Ｖｏｒｔａｒｏ持ち歩く癖は。その後名古屋で港湾労働者（仲仕）として外国船で働くときも、市役所の道路工夫として鶴はしを振るうときでも、シャツに緑の星をつけて、ｐ,ｖはいつも持っていました。

緑の星について。１６才の時にエスペラントを学習して以来、当時少年鉄道員の私は、ＪＥＩの創立者小坂狷二技師の部屋に勤務していた、鉄道員の制服の襟に緑星章をつけていた。以来、どんなときでも外出の際は必ず付けていました。。成人して、昭和１１年、教育召集で浜松の部隊に出頭しときに、整列中に憲兵に、それはなんだときかれて、説明したが（国際語を話す人の印だ）と答えるが、その国際という語が、さらに疑惑を呼んだのです。さすがに陸軍砲兵二等兵の軍服にはに付けられません。

なを日本のエスペラント運動の先覚者達、小坂狷二、中垣虎児郎、三宅早平、宮本正男等は、終生胸から緑星章を放さなかった。もっとも宮本さんは、一時、ＳＡＴの赤い星を付けていたが。いけないことだが、私は、今は付けていません。先年、中国。青島の太平洋大会でお別れの日に、中国のサミデアーノ達から、色々の緑のインシグノを頂いた。なるべく胸に付けることにしよう

★――――――――――――――――★

サハリンのＥＳＰ－ＩＳＴＯとの交流のその後

Nia korespondado kun saĥalina samideanino

HOŜIDA Acuŝi (Tomakomai)

En nia 56-a Hokkajda Kongreso(1992) ni aprobis la proponon de la Internacia Fako de HEL (=Hokkajda Esperanto-Ligo), ke ni korespondu kaj helpu samideanojn en nia najbara insulo Saĥalino.

Tamen la afero iom stagnis pro ofta foresto de la faka respondeculo, k.a. Lastatempe ni sukcesis donaci kelkajn lernolibrojn, vortarojn k.a. al la Biblioteko de Tekniko-Ekonomia Instituto(Eduka Kolegio) en Jujno-Saĥalinsk, pere de tiea studentino, samideanino Marina Sadovnikova. En ŝia lasta letero de 1988.08.18 ŝi skribis, ke ŝi portos la librojn al la kolegio kaj komunikos, ke tio estas donaco de Hokkajda Esperanto-Ligo al la kolegio.

第５６回道大会で承認されたＨＥＬ国際部の提案（サハリンとの交流の件）はその後国際部関係者の多忙や不在（ヨーロッパ、カンボジャ、カリフォルニア、メキシコでの活動）などの理由でなかなか進まなかった。

５月になってユジノサハリンスク教育大学へ寄贈する本が決まり、３１日のＨＥＬ委員会でサハリンへの発送、連絡は星田に任された。ところがロシア語文を書くはずの人と連絡がつかず２ヵ月近くが過ぎたので７月２１日Ｍａｒｉｎａさんに事情を説明して以下の本６種類を書留で送った。

Jen la libroj donacitaj de HEL.

①Ｅｓｐｅｒａｎｔｏ：ＭＥＴＯＤＩＣＥＳＫＩＥ　ＲＡＺＲＡＢＯＴＫＩ（=Metodikaj Studoj）
②Ｄｒｂ　Ｅｓｐｅｒａｎｔｏ：ＭＥＪＤＵＮＡＲＯＤＮＹＩ　ＹＡＺＹＫ（Unua Libroの復刻版）
③Ｅｓｐｅｒａｎｔｏ－Ｒｕｓｓｋｉｊ　／　Ｒｕｓｓｋｏ－Ｅｓｐｅｒａｎｔｓｋｉｊ　ＳＬＯＶＡＲＪ
（E.－Rusa kaj Rusa－Esperanta Vortaro）
④Ｅｓｐｅｒａｎｔｏ：Ｐｉｅｒｒｅ　Ｊａｎｔｏｎ（ｕｅａ）
⑤Ｐｏｓｔｍｉｌｉｔａ　Ｊａｐａｎａ　Ａｎｔｏｌｏｇｉｏ（戦後日本文学選集）
⑥Ｖｕｌｐｏｊ　ｄｅ　Ｃｉｒｏｎｎｕｐ（絵本：チロヌップの　きつね）

上に見る通り、エスペラントのもの、ロシア語のもの、日本語入り絵本といろいろ。　なお①～③はＭａｒｉｎａさんにも各１部贈呈した。

Aziaj samideanoj vizitis niajn urbojn

カンボジア・エスペラント協会会長チョム・ソッカ氏とネパール・エスペラント協会会長ムクンダ・パシック氏が，札幌と苫小牧を訪問

今年の世界大会には，多数のアジアのエスペランチストが参加しました。アジアの１１カ国からよりすぐったエスペランチスト１１人が８月１３日から３０日まで「アジア訪問団」として日本各地を訪問しましたが，北海道にはカンボジア・エスペラント協会会長チョム・ソッカ(CHHIM SOKHA)氏と，ネパール・エスペラント協会会長ムクンダ・パシック(MUKUNDA RAJ PATHIK)氏がいらっしゃいました。

札幌はＳＡＴが中心となって座談会を，苫小牧では苫小牧エスペラント会が中心となってちょうど訪問日に開催された「公民館まつり」で両氏の講演会を開催しました。

札幌での座談会は，北区北１８条西４丁目の喫茶店「ひらひら」で，札幌ＳＡＴとＳＥＳの会員が，両氏を囲んで懇談し両国のエスペラント運動の状況や日常生活等をお聞きしました。ネパール・エスペラント協会では来年の２月から３月にかけてヒマラヤ観光団を募集し日本からの参加を歓迎しますとのことです。

⇦ 最後に皆で

(時間の都合で途中で帰られた方もいるので，最後まで残った人しか写っていませんが)

熱心に質問に耳を傾ける両氏

ＳＥＳの児玉会長にネパールの帽子をプレゼント

苫小牧での講演会については，苫小牧市公民館サークル連盟で発行している「はあもに」に下記のとおり記事が載りました。

(1)　　サークル連盟だより

はあもに
第218号
平成6年9月6日
寿町1丁目2－1
（金子鉄一方）
苫小牧公民館
サークル連盟
発行　高橋哲夫
（題字　広田岳洋）

盛大だった公民館まつりをふり返って

公民館まつりも今年で十八回を迎えた。外国人来賓を迎えての講演会は初めて。ステージ発表の改革は効果をあらわしてきたようだ。ところどころでの高橋会長のあいさつには必ず「公民館改築への希望」が述べられていた…。

★講演会（八月二六日一七～一八時）

入国ビザ取得がうまく行かず講師の予定が変わり「カンボジア・ネパールの文化と社会を語る」講演会になった。

カンボジア・エスペラント協会会長のチョム・ソッカさんは、一九七〇年以来の内戦で国家体制が四度変わったこと、ポルポト政権の虐殺で母や親戚も殺されたことなどを話した。

ネパール・エスペラント協会会長のムクンダ・パシックさんは作詩家としても知られた人。今後の旅行中に作った「日本は美しい国、自然も、町も…」という歌を披露し、ネパールのエスペラント運動、女性の社会進出、テレビドラマ「おしん」は皆知っている、など話してくれた。一時間の通訳つきの講演はちょっと時間的に窮屈な感じがあったが、どうしたらよくできるか、考えたい。

★サークル交流パーティー

（八月二六日一八・三〇～二〇・三〇）

二階ホール。九面のテーブルに出席者約百五十人。今年は外国人来賓（講演会講師）の紹介があったのが目新しかったが、そのうち一人、ムクンダ・パシックさんのネパールの歌は大喝采を浴び大いに会場を盛り上げた。本職の歌手、おなじみの立花美樹さんの歌はいつもながら見事だったが、今年は外人歌手が一人増えた感じになった。

★展示部門

二五日一七・三〇よりパネル設営。新しいパネルで一段と見栄えがよくなったが、工具不足で少し手間どった。各団体の力作が並ぶ中で、書道作品の質と量、木彫りの実演などが目を引いた。二八日夜撤去。

第６回ＨＥＬ委員会報告
RAPORTO DE LA SESA KOMITATA KUNVENO DE HEL

１９９４．７．１２．　　星田　淳

「日時」７月３日（日）１４時～１７時

「場所」室蘭駅～室蘭港湾労働者福祉センター～室蘭港フェリーターミナルなど

［出席者］　須藤昭三、　星田淳、　阿部映子、馬場恵美子

［議事］

＊第５８回北海道エスペラント大会

前回の決定にしたがって今回は現地打合せ。

室蘭市教育委員会の後援を得た。後援申請書は須藤委員の名で出した。

会場（室蘭港湾労働者福祉センター）下見。中会議室（大会会場）は２４日１３～１７時と２５日９～１７時、小会議室（１日講習用）は２５日９～１２時　の間借りる。

宿舎は８月２０日までに個人で申し込む。

大会提案も８月２０日までに出して下さい。

本を販売する（馬場）：ＰＲコーナーを作る（須藤）：１日講習と市民向け講演会を開く（講師はＳ－ｒｏ　Ｒｅｚａ　に星田が依頼する）

行事内容、進行を協議。それをまとめた大会プログラム案は星田が作る。名札は阿部が担当。各地方会の旗があれば持参して下さい。

大会記念品としてＨＥＬ名簿、絵はがき、室蘭観光協会のスチールミラーが検討された。

＊Ｈｅｒｏｌｄｏ５２号、遅れているが７月１１日にだす（阿部：後１５日に延期）

＊アジア訪問団の件

Ｓ－ｒｏ　Ｃｈｈｉｍ　Ｓｏｋｈａ（Ｋａｍｂｏĝａ）　と　Ｓ－ｒｏ　Ｃ．Ｄｏｇｓｕｒｎ（Ｍｏｎｇｏｌａ）の２人が　８月２５日午前～２７日日中の予定で来道する。２６日午後～夜宿泊は苫小牧で計画する。２５日札幌で何か計画できると都合がいい。

Ｈｅｒｏｌｄｏ　ｄｅ　ＨＥＬ
第５３号（1994.9.24）
北海道エスペラント連盟機関紙
編集部
〒001 札幌市北区北12西1パークMS602
阿部映子気付 ☎011-756-2291
郵便振替口座
０２７００－６－１７０７５
北海道エスペラント連盟